

教え子との出会い経験を想起する

藪添 隆一 ・ 樽本 導和* ・ 藪内 雅昭*
(学校臨床心理) (附属坂出小学校) (附属坂出小学校)

篠原 智子* ・ 清水 顕人* ・ 芳我 清加*
(附属坂出小学校) (附属坂出小学校) (附属坂出小学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*762-0031 坂出市文京町2-4-2 香川大学教育学部附属坂出小学校

A Study of the Experiences in Encountering Students based on Teachers' Notes

Ryuichi Yabuzoe, Michikazu Tarumoto*, Masaaki Yabuuchi*,
Tomoko Shinohara*, Akihito Shimizu* and Sayaka Haga*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Sakaide Elementary School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 2-4-2
Bunkyo-cho, Sakaide 762-0031*

要旨 教え子との心の出会い(エンカウンター)経験は教師の心に在る神話である。子どもとの出会いは自己との出会いでもあり、その瞬間、人間的な成長が双方に起きているのである。忘れられない出会い経験を想起し、臨床心理学的分析を付与し、意味付け、教員集団で共有した試みを例示する。

キーワード 出会い経験 感情機能教育 居場所づくり ワイルドネス 遊戯性

はじめに

心の問題を抱える子どもの増加は、教師に無力感をもたらしている。また、臨床心理士等の専門家が学校現場に派遣されることが多くなるにつれて、教師が「心の問題」から離れることが危惧される。「専門家まかせ」になってしまう傾向があるのではないかと危惧である。その結果として、より良き人格変容に寄与する喜びから教師が離れてしまっているとすれば憂慮すべき事態と言わねばならない。

臨床心理士の資格が誕生する前の時代、学校でのカウンセリングは教師が行っていた。筆者

も高校教師時代にカウンセリングを知った。カウンセリングワークショップ(エンカウンターグループ)で、他者と出会うことは自己と出会うことでもあるのだと気づくことが出来た。このとき、教師である私はカウンセラーとしての私と出会ったのだと思う。

学校カウンセリングは、教師がカウンセリングに出会う時から始まる。しかし、その出会いは<未知との遭遇>といったものではない。個々の教師が、自分の過去に心を開いて、教え子との間に起こった数々の出会いのなかから、真に<出会い>と呼ぶことのできる経験を想起して、人と人の交流が互いの成長と変容に及ぼ

す影響の何たるかを実感することが、教師がカウンセリングに出会うことの本当の意味なのである。(1992 藪添) <1>

真に<出会い>と呼ぶことのできる経験(エンカウンター)は、対他的コミュニケーションと対自的コミュニケーションの一致(共感)の瞬間に発生する。<2>

それは「心の闇に隠れていたものが浮かび上がってくる経験」(前掲書 藪添)であり、瞬間的、直感的な現象といえよう。

そのような出会い経験をどの教師も思い出として胸の奥に秘めていると考えた。附属坂出小学校で校長だった時、教師全員にお願いして、手記を書いていただいた。すぐに16名全員から「出会い経験」が集まった。それだけで筆者は感動した。読めばさらに感動した。ひとつひとつに臨床心理学の視座からのコメントを付して重松清の同名の著作に因み「青い鳥」と題した手刷りの小文集を全員にお返ししたのだった。

同校は「思考力を育てる」ための授業作りを研究テーマとしていた。ものごとを判断する「思考機能」を補うのが「感情機能」である。思考力を育てるために思考機能をフルに発揮しなければならない教師集団には「感情機能」の補償が必要となる。校長として全体を観ていると、「感情機能教育」(2004 J.ヒルマン) <3>を補償する必要を痛感していた。

「智(思考機能)に働けばかどが立つ」<4>のであるから、その分、情(感情機能)を満たすことが求められるだろう。情の泉は教師個々の教育実践の源泉であるに違いない。そうだとすれば、教師が教え子との心の出会い経験(感情機能教育経験)を想起記述することが必要であり、個々の記述に校長が臨床心理学的解説と共感的理解を示し、教員全員と共有することが学校全体の心的エネルギーを補給することとなるのではないかと考えた。紙数の条件内で「青い鳥」の一部を以下に例示したい。

1. 事例1－「瀬戸の海で」

(1) 出会い経験

授業中教室から飛び出す、暴力をふるうなどを繰り返し、集団生活に馴染めない小学3年生の男の子A君がいた。前担任から「家に言うよ」という台詞がよく効くこと、毎日家庭訪問をしていたことを聞いた。彼が「悪いこと」をしたとき家庭訪問をすると、彼の父親からは「学校があまい。悪いことはたたいてでも指導しないからだ」、母親は「この子がいなくなればいいと思うことがある」と言った。私の目の前で彼をたたいたり、彼がパニックを起こし自らの頭を柱にぶつけたりすることもあった。

彼は悪いことをする度たたかれ続けてきたのである。悪いことをした日は必ず「先生家に言わんとってな。家に来んとってな」と私に懇願した。母親と彼に、「良い行い」を伝えるに行くことを約束し、8割いいこと、2割改善したらいいことを伝えるように心がけた。

すると、彼は放課後、学校に遊びに来るようになった。私は、しめしめと思ひ近くの海で彼と釣りを楽しむようになった。家のこと友達のこと親戚のこと過去のことすべて話してくれた。

しかし、彼の要求は果てしなく、出張がある日でも、会がある日でも、毎日遊びに来た。遊ぶ日の枠をつくってもなかなか受け入れられなかった。「出張休め」と怒鳴ったり、「仕事をはよせんからや」と、どくれる(ふてくされる)こともあった。

でも、彼が素直に納得して帰るときがあった。それは、私が「腰の病院へ行く」と言ったとき、「ばあちゃんの見舞いに行く(私の祖母は死期が近づいていた。彼とつりをしながら寝たきりの祖母のこと、祖母が魚が大好きであることを話していた)」と言ったときである。家に帰って魚をもってきて「これ先生のばあちゃんに食べさせてあげて」と持ってきた。

祖母が亡くなり通夜の日、彼から「明日釣りに行こう」と誘いの電話があった。祖母が死んだことを告げた。次の日、母親が彼から聞いた

と、わざわざかけつけてくれた。それからも、しばらく自分が釣った魚を「先生のばあちゃんに供えてあげて」と持ってきた。

私は1対1のつきあいの中で、彼の心の優しさを感じることができた。

(2) コメント

暴力、粗暴、集団不適応は、子どもが親からの愛情を感じ取れずにいたことによって起こる。特に親から暴力的にしつけられ続けている子どもは、自分を責める傾向、他人を責める傾向をもちやすい。子どもは「自分が悪い」と自分を責め続けることに耐えられないときに他者を責める。それでも満たされない攻撃性は環境に及ぶ。野原への放火、動物虐待等の自然環境破壊や他者、集団への不適応、攻撃は、はなはだしくなれば大事件として発生する。とすれば、「悪いことはたたいてでも指導しないから」こうなるのだと、先生の前でこれみよがしに我が子をたたき父親が「原因」なのか。父親自身も、そのまた父親に暴力的に扱われてきたことも想像できるので、安易に「原因」「悪者」を探し出すことはよくないのである。

担任はやさしい人である。きっと、やさしい親に恵まれた人にちがいない。だから、A君の父親を悪者にしなかった。A君を守ることをせずに「この子がいなくなればいいと思うことがある」と先生に言う母親の話聴いてあげるだけで責めなかった。

A君は両親に好かれた子どもである。だから、両親を責めない、やさしい先生が大好きになったのだろう。そうでなければ、親に自分のした悪いことを「言わないで」、「家に来ないで」との訴えに対して「良い行い」を伝えに家に行くことを言うだけで、A君が学校に来るとは思えないのである。

A君は放課後に学校に遊びに来るようになった。先生は「しめしめ」と思う。釣りの好きな人は「仕掛ける」のも好きなのだ。A君を海に誘って二人で魚釣りを楽しむようになる。釣りをしながらA君は先生に、家のこと親戚のこと過去のこと「すべて話してくれた」のだった。

これは、素晴らしいカウンセリング経験だ。瀬戸内海はカウンセリングルームになったのだった。

二人が釣ったのは瀬戸の海の産物としての魚だったのだが、実は海(産み)の「母なるもの」の懷に抱かれていたのかもしれない。ここでA君は蘇生しようとしていた。生まれかわろうとしていた。出張で釣りができない先生に行くなと我がまを言った。愛に飢えた子どもは大人の自己犠牲を要求するのだ。

ところが、先生の祖母の死と通夜、葬儀にはA君は我がまを忘れ、献身的に供物を捧げる。自分が釣った魚を、魚が好きだった先生のおばあちゃんに「供えてあげて」と持ってきたのだった。このときには、A君の母親も参列する。祖母、先生、母は、欠損していた母性を補給できた。補給の心理的環境は瀬戸内海であった。

2. 事例2 - 「ありがとう」

(1) 出会い経験

小学5年生のクラスでの出来事である。大変優秀な子が多く、問題もほとんどおこらない落ち着いたクラスであった。しかし、その中で学力の極端に落ちる3人の女子がいた。この女子は3人揃って少々太り気味。行動ものんびりしており、クラスの中では全く活躍できない3人組。しかし、素直で他人を疎むことを知らないとでも心の優しい3人。このクラスの子は皆、友達に優しい子ばかりではあったがこの3人のあまりのスローペースに、「おい、〇〇。はよ動け」という男子からの厳しい声も時々聞こえてきた。そのためか、3人ともいつも笑顔が遠慮がち。自信のなさそうな言動が気になっていた。普段の授業の中では手も挙げないし、指名してもほとんど答えられない3人。また、言いたいことがあっても、クラスの他の子の目が気になって担任には話しかけられない。いつも同じもじ自分を表現しない3人の姿に、時には厳しい叱咤の言葉も掛けてしまう。勉強が分からないのは本人たちが一番辛いのだと理解しては

いても、ついつい語気荒く「考えなさい」と言っ
てしまい反省することもたびたびあった。いくら
「考えなさい」といっても自分で考えられない、
答えにたどりつかない子どもたちに対して何
かしてあげられることはないのだろうかと考え、
放課後、宿題やドリル類の直しを3人と面
と向かい合ってする時間をできるだけ確保しよ
うとした。そして、できるだけ彼女たちが他の
クラスメイトの目を気にせずのびのびと教室
で話ができる時間を作ってやろうと考えた。も
ちろん他の子たちの間違い直しも同じように見
てやるのだが、他の子たちはさっさと間違い直
しを終わらせて下校していく。彼女たちの学
力では自分たちでは間違い直しができないた
め、必然的に毎回3人が残ってしまう。他の子
が帰ってしまった後、一問ずつ丁寧に解説しな
がら、間違い直しをしている合間にいろんな話
を聞いた。家族のおもしろいエピソード、3人
の将来の夢、好きなアイドルのこと……。他
の5年生に比べると随分幼く、たどたどしい話
しぶりだが大きな声で笑いながら絶え間なくお
しゃべりを続けていく。その笑顔につられてつ
いつい担任の私も笑ってしまう。

ある日、放課後の職員のおしゃべりまでの時
間、いつものように3人と間違い直しを一緒
にした。先生は会に行くから、遅くならないよ
うに3人で帰るよう声を掛けて私は会に出掛け
ていった。会が終わって教室に戻ると、黒板にな
にやら落書きが。よく見ると「先生、ありが
とう。さようなら」の文字の横に3人の連名が。
色とりどりのチョークで縁取られたその文字を
見ていると、3人で和気あいあいとおしゃべり
しながら一生懸命に黒板にメッセージを書い
ている3人の姿が目につかび、心の中で思わず
「こちらこそ ありがとう」とつぶやいた瞬間
だった。

3人はその後、それぞれの個性を2年間かけ
てゆっくりと学級の中で開花させていった。宿
泊学習のスタンプの中で恥ずかしがらずに踊り
を披露したり、自分から他の友達に話し掛けて
いったり。クラスの中心で皆と一緒に笑う3人
の姿が増えていった。何より変化していったの

は、ノートに自分の考えを書くことができるよ
うになったことだ。それまでは、板書を写すこ
とすらままならなかった3人だが、量は少ない
ものの、自分の言葉で考えを書くようになった。

卒業文集で3人が書いた将来の夢は看護師さ
んと介護師さん。人のお世話をする人になりた
いという素直で優しい思いが文集の中で語られ
ていた。

(2) コメント

担任は小学5年生女子3人組との出会いを書
いている。優秀な子どもたちが多いクラスの中
で、学力的に劣る3人が身を寄せ合うように生
きていた。優秀な集団の中で劣等感に苛まれて
過ごすことほどみじめなことはない。自分と同
じ程度の人がいると本当に救われる。3人がの
ろのろと、のんびりして見えるのは器質的な要
素に加えて劣等感からの無気力のあらわれとも
理解できる。周りの優秀で活発な子どもたちに
合わせようとするのをあきらめているのだ。

先生は3人組を分けようとしなかった。グル
ープ形成は女の子の居場所づくりの基本であ
ることを経験的にもご存じだったからだろう。
女の子たちは集い、笑い、おしゃべりする。一
人がトイレに行こうとすると皆で行く。群れて
楽しむ思春期を過ごすことができれば、将来、
群れて子育てする母親たちの仲間入りができる
だろう。

「のびのびと教室で話ができる時間をつく
ってやろう」と放課後に3人の話を聞くように
した。他のクラスメイトの目がなくなると3人
は「大きな声で笑いながら絶え間なく、おしゃ
べりを続けていく。その笑顔につられて」先生
も笑っていたという。宿題、ドリルの間違い直
しを自分でできない彼女らにとっては辛い時間
のはずの居残りが楽しみの時間になっていった。
間違い直しは平等に他の子どもたちにも居残
らせているのである。他の子は自力でやり終
えて帰宅していく。できない3人は取り残され
ているにもかかわらず、自分たちだけのための
雑談タイムを心待ちにしていたはずである。

教師には平等性が要求される。しかし、特別扱いが必要な子どもたちには特別扱いするべきである。この担任による特別支援は、子どもたちにとって真に自然なお楽しみとなったのだった。先生が職員会に行った後も、彼女らはおしゃべり会を続けていた。先生が教室に戻ると、黒板に「色とりどりのチョークで縁取られた」3人の連名と「先生ありがとうございます。さようなら」とのメッセージが書かれていた。自分の名前に「色」がついたこと、あたかも教室が「色とりどり」に見え始めたことへのお礼だったのかもしれない。

その後3人は次第に個性化のプロセスをたどっていった。自分の考えを自分の言葉で言うことができるようになっていった。担任との出会いは、自分との出会いだっただけである。彼女らが卒業文集に書いた将来の夢は「他人のお世話をする」職業だった。お世話されたことで持った夢が「お世話する」仕事だったのである。

3. 事例3－「私の出会い経験」

(1) 出会い経験

郊外にある山に囲まれた田舎の小学校でのことである。素朴で純真な子どもたちが多く、地域も学校がすることについて大変協力的であった。私の出会い経験は、そこで出会った女子3人、C子、D子、E子である。

当時は市内の小学校が参加する女子のソフトボール大会があり、11月の大会前2か月間位は、希望者が放課後に練習をしていた。私はその指導担当になっていて、キャッチボールも十分にできないような5、6年の女子の子どもを、先輩の先生方と一緒に指導していた。

我が小学校チームは、ソフトボール大会でなかなか勝てなかった。私が初任者の年から2年続けて初戦敗退。3年目になって、次のキャプテンになりそうな子どもから「先生、もっと早く練習を始めてよ」と言われた。私は「勝ちたいんだろうな」と思った。「でも、他の陸上記録会の練習とか、水泳もあるし、まだ一番若い自分が勝手なことでもできない」と思っていた。

子どもには、「そやなあ、考えとく」としか答えられなかった。

しかし、その後も何度もそのように言われた。「先生、練習しよう」と。そう言われる度に、「ごめん」という気持ちで、あいまいな返事を返していた。

結局その年は、少し早目に練習を始めた。先輩の先生や校長先生にも相談せず、勝手に始めた。子どもたちはすごく喜んで参加した。私も、友達のソフトボール経験者を呼んでコーチをしてもらうなど、かなり気持ちを入れて指導した。その年は、他の行事との関係もあって、大会が2回行われた。

1回目の大会で、我が小学校チームは自信満々だった。なぜかと言うと、他のチームよりは練習を積んできたからである。子どもたちも優勝する気で試合に臨んだ。しかし結果は、またしても初戦で敗退。意気消沈した。2回目の大会があるにもかかわらず、子どもたちはやる気をなくしてしまった。運動神経抜群の子どもを含めて、3、4名がやめてしまった。

2回目の大会では、抽選に恵まれた。小さい学校と当たったこともあって、2試合を勝ち進み、準優勝という結果になった。その時に試合に出ていた5年生のメンバーが、C子、D子、E子である。体は小さく、体力にはそれほど恵まれていないのだが、ソフトボールが大好きで、練習は絶対に休まないような子どもだった。

準優勝した次の日のことだった。昼休みに3人がやってきて、「先生、ソフトの練習しよう」と言ってきた。前の日に試合が終わったばかりなので、びっくりした。普通なら半年以上は休みという流れである。「試合が終わったばかりやぞ」と言う、「優勝したいんや。だから練習見てよ」と言ってきた。目は真剣そのものだった。私も「そうできたらいいな」という思いはあったが、若い自分が勝手に許可するわけにいかず、どうしたものかと悩んだ。考えた挙句、遊びということなら構わないだろうと考えて、「土曜日の昼からやろう」と答えた。私の出会い経験は、その土曜日のことである。

11月の気持ちよい天気の日曜日、昼から3人がやってきた。私を含めて4人がグローブを1つずつ持ち、バット1本とボールだけを用意した。「ピッチャーとバッターと、守りが2人で交代しながらやろう」と言って始めた。5年生なのであまり上手ではなかったのだが、その日は全く違っていた。ピッチャーが投げたボールを、バットできれいにとらえ、いつもよりずっと遠くまで飛ばした。それを捕る動きもすばらしかった。ファインプレーが続き、その度に「やったー！」という声や、最高の笑顔があった。3時間くらいは続けたらどうか。終わったあと、「今日は、すごかったなあ」と声をかけると、満足そうにうなずいている3人がいた。私もおそらく3人にとっても、清々しい時間だった。

私は、その後も「どうしてあんなにいいプレーができて、気持ちのよい時間を過ごせたんだろう」と考えていた。「ただ風向きがよかったから、あんなに飛んだのかな」とか「試合が終わって、気楽に練習したからかな」とも考えたが、それだけではないような気がした。3人と私に気持ちの面で一体感があったように思う。練習したい、上手になりたいという強い思いがある子ども。去年はできなかったが、やっと子どもの思いに応えられたという喜びがある私。そんな一体感があったように思う。その後何度も、3人とは「あの日の練習はよかったなあ」と話し合った。

出会い経験としてのその日の後も、毎週土曜日に練習を続けた。初めは3人だけで練習していたが、「私も練習に来たいです」という子どもがいて、メンバーは少しずつ増えた。土曜日にこっそりやっていた練習日も、他の先生方も黙認してくれて、平日も加えてするようになった。

(2) コメント

素朴な山間の小学校で女子3人と先生は真の「出会い（エンカウンター）」を経験した。彼女たちは「勝ちたい自分」と出会った。先生は「勝たせてやりたい自分」と出会った。

勝ちたい気持ちはアグレッシブである。攻撃的である。この本能的とも言える「攻撃的な欲動」は、教育において最も待たれる発達欲求の原動力に他ならない。

「素朴で純真な子どもたちが多く、地域も学校がすることについて大変協力的」な学校では、社会性に富んだ善良な生徒が育つ反面、攻撃性は出しにくい。先生もまた社会性を優先し、本音と攻撃性を抑圧する環境の影響を多分に受けていたのかもしれない。学校で一番若い新人教員であることを自覚し、狭い運動場を様々な種類の練習に使わねばならないところから生じる優先順位も考慮する先生の性格もあっただろう。いずれにせよ、生徒たちが「勝ちたい自分」を自覚したのを感じて「勝ちたいだろうな」と思い、「勝たせたい」と願うところまで先生が変化したのだった。ソフトボール大会を契機に「もう負けたくない!」「今度こそ優勝したい!」とのワイルドネス（攻撃性）が、それも女の子たちからわき起こったのだった。

古代ギリシャにおける貴族の成女式（イニシエーション）では、成人する娘たちが合宿し野山をかけめぐり男顔負けの荒行を行った。熊の毛皮をまとい、顔や体に炭を塗り付け、荒々しい言葉と仕草でワイルドネスを発散する一定の期間が過ぎ成女式当日、彼女らは、衣装も化粧も仕草も完全な美しい貴婦人として神殿に登場したというのだ。なぜ荒々しい男勝りの荒行を行うイニシエーションが、淑女になるために必要なのか？それは女の子として育てられる間に男性性（アニムス）が抑圧されており、これを表に出し切ることで完全な女性性を獲得するのだ。女の心に押し込められている男性性（アニムス）が表出するときの迫力は文字通り「男勝り」である。

勝ちたい気持ちは準優勝した後も燃え続けた。大会の終わった次の日の昼休みに3人がやってきて、「先生、ソフトの練習しよう」と言ってきた。「試合が終わったばかりやぞ」と先生が言うと、「優勝したいんや。だから練習見てよ」と「真剣そのもの」の目つきで言う。先生はここに至っても「若い自分が勝手に許可

するわけにいかず」と悩んでいる。ウイークデーの正規の活動を続けることがはばかられ、「遊びということなら構わないだろう」と土曜日の昼からやることになった。

社会性の枠を突き破るには二つの要素が必要である。一つはワイルドネス。もう一つは「遊戯性」である。ヨハン・ホイジンガは遊戯を「俗世間の損得利害性とは関係ないことに競い合い、熱中すること」(ホモ・ルーデンス)と定義している。<5>

その土曜日、まさに映画「フィールド・オブ・ドリームス」のような夢の球宴が展開することになる。<6>

土曜日の遊びとして「ソフトがしたい」少女たちの願いが実現する。それは何かが乗り移ったようなファインプレーの連続だったのだ。「私の出会い経験は、その土曜日のことである。11月の気持ちよい天気の日曜日、昼から3人がやってきた」と物語のように先生は語るのである。

「ピッチャーとバッターと、守りが2人で交代しながら」の打撃と守備が合致することの困難な条件でありながら「ピッチャーが投げたボールを、バットできれいにとらえ、いつもよりずっと遠くまで飛ばした。それを捕る動きもすばらしかった。ファインプレーが続き、その度に『やったー!』という声や、最高の笑顔があった」遊びが3時間も続けることができたのだ。

先生は「どうしてあんなにいいプレーができて、気持ちのよい時間を過ごせたんだろう」と考えていた。「ただ風向きがよかったから」「気楽に練習したから」か、とも考えた。しかし、それだけではないような気がしたのだ。そして、「気持ちの一体感があった」からと思いつくのである。少女たちのアグレッシブな向上心と願いを実現させたい教師の願いが出会った、幸福な3時間を先生は生き生きと想い起こしている。

4. 事例4ー「ダンボールハウス」

(1) 出会い経験

新しい小学校で3年生の担任となったとき、私が担任する学級には、「ちょっと大変な子」Fがいると聞いた。

学級開きを終え、何が大変なのだろうと思っていた時に最初の事件が起こった。授業の始まりを知らせるチャイムが鳴っても、Fは帰って来ない。数分後に、みんなが静かに着席している教室へ、Fはあわててとび込んで来た。私は一喝し、学級でのルールの大切さを子どもたちみんなに示そうとした。「何していたんだ!」という私の大声を聞いて、Fは顔色を変え、ドアを閉めて学級をとび出した。そこからしばらくは学校中を数名の教員が大捜索することになった。Fが校外に出ている可能性もあり、学校周辺も探した。数時間して、プールの裏の方にいる所を発見されたFが教室に戻ってきた。Fはすっかり落ち着いて、「先生に嫌われたと思った」と話してくれた。それが、Fとの出会いであった。

Fの特徴は、次のようなことだった。感情の起伏が激しく、怒りの激しい時は物を壊し暴力を振るうが、1時間ほどですっかり落ち着く。自己肯定感が低い。数年前のことをつい最近のことのように思い出し、怒りだす。長時間の着席が難しく、授業中に席を離れて歩く。相手の感情を読み取りにくく、場の雰囲気が読めず孤立する傾向にある。宿題は忘れずに提出できるが、整理整頓が苦手な机やロッカーの中が乱雑になる。

Fが教室をとび出すことで、授業の中断が何度も起こった。中断するたびに他の子どもたちの学習が遅れるだけでなく、他の子どもたちのもつ不公平感「先生はFばかりを見ている…」をひしひしと感じた。そして、他の子どもたちのFへの批判的なまなざしを、私だけでなくF自身も少しずつ感じるようになっていた。Fの孤立を防ぐためにも、授業を中断させず他の子に不公平感をもたせないことが必要だと考えた。一方、私はF自身の学力低下を防ぎたかつ

た。Fは聴覚刺激に敏感で、ちょっとした教室外の物音に反応して注意をそらせたり、手で耳をふさいで机にうつぶせになったりすることがあった。

ところが、Fは教室内をうろうろと歩きながらも教師の話聞いており、教室内にいさえすれば学習内容を聞き取るだけの能力があった。Fを教室内に留めることで、学習内容が耳から入り、学習の大幅な遅れを防げると考えた。

校長先生はじめ、先生方は大変協力的だった。「Fがとび出したらすぐに職員室へ電話してください。Fを見ておくから大丈夫。」と温かい言葉をかけてくださったことは忘れることができない。

Fは、とにかく暗くて狭いところが好きだった。何度か教室から脱走してたどり着いた場所は、プールの裏、階段の下の三角の場所、カーテンの裏…。共通点は暗くて狭いところだと分かる。なぜかとFに聞くと、「落ち着くから」なのだそう。Fを教室から出さないようにするには、教室内にFの落ち着く場所があれば良いのだ。教師用の机を窓側の壁際に寄せ、教師用机と壁と本棚で三方を囲み、出入りは黒板の前に立つ教師の横からのみできるようにした。暗くするために、三方を囲んだ場所の上から約70cm四方の補助黒板をかぶせて、Fの部屋が完成した。

授業中にいらしたFに声をかけ、トイレに行かせたり鉛筆を削りに行かせたりと意図的に歩かせ、それでも駄目な時はFの部屋へ行くように促す。Fが自分から部屋へ行きたいと申し出ることもあった。

落ち着いてくると、Fは部屋から手を挙げて発表することもあり、その後の休み時間には机に戻ることもできた。もちろんいつもうまくいくわけではなかった。教室をとび出したFをかかえて職員室へ連れて行くこともあった。Fにかまれたりひっかかれたりして、私の腕の傷はしばらく増えた。しかし、1学期を過ぎたころから「Fがあんまり教室を出なくなった、目立たなくなってきた」という先生方の言葉が多く

なり、それとともに私の腕の傷は少なくなった。

しばらくして、Fは休み時間に特別支援学級へ遊びに行くことを好むようになった。そこにあったのは、手作りのダンボールハウスだった。大きなダンボール1つ分で、子どもが二人入れるかどうかという大きさだ。しかし、屋根も窓もあって立派な家だった。窓を閉じれば薄暗くて、暗闇付き一戸建てだ。

Fはその中へ入るのが大好きだった。特別支援学級の先生から「Fにもこんな家があったらうれしいでしょうね」と言われた。わずか千円程度のおもちゃのダンボールハウスだったから、Fの部屋がある場所へ置けば良いだけだった。このダンボールハウスなら、多少蹴ってもFが傷つくことはないし、自分の家だと思えば大切にすることもできる。しかし、私はこの暗闇付き一戸建てをFに与えることについて大変悩んだ。教室の一角に家が建つ。これを周囲の子がどう思うだろうかと考えた時、このような不公平、不平等が許されるはずがないという気持ちだったからだ。Fだけ特別＝不公平。この考えにずいぶん苦しんだが、最終的にはFの希望を聞いたうえで暗闇付き一戸建ての建設を決めた。

放課後、みんなが帰った後の教室で、Fは自分の家の建設を始めた。教師から与えられるのではなく、ダンボールの家を自分で作るようにさせたいと考えた。自分で作ったものならば大切にしようと考えたからだった。ガムテープで補強したり、窓をつけたりと、もともと工作の大好きなFは大喜びでダンボールハウスを作るのだった。家は2時間程度で形となり、狭くて暗い素敵な一戸建てが完成した。他の子どもたちは、この家を「Fさんの家」と呼んだ。

周囲の子はFに「入っていい?」と聞き、Fも自分の家に招待し始めた。家を通して交流が始まってしまったのは予想外だった。不公平と考えるかどうか、それは周囲の子どもたちが決めることであって、教師が押し付けることではなかったようだ。

その後、いろいろな事件が起こるたびに、こ

のダンボールハウスはFの怒りを受けてぼろぼろになっていく。屋根が取れたこともあった。放課後、Fと一緒に家の修繕を行いながら、いろいろと話す機会もあった。そうして、3年生が終わる前には、家は修繕不可能なほどに傷ついていた。

最後にFは「先生、もうこの家、卒業や」と言って、思い切り壊してしまったのだった。Fはダンボールをたたんでひもでくくり、自分でゴミ置き場まで運んだ。Fの家の取り壊しは、こうして完了した。家を欲しがるとはその後なく、いらいらしたときはちょっと歩いて教室の隅へ行ったり、ベランダでうずくまったりして時間を過ごし、クールダウンするようになった。

Fとの出会いは、それまでに私がもっていた価値観を大きく変えた。威圧的な態度、厳しい口調、そのような方法が全く無力だと分かった時、教師としての自分の姿勢を見つめ直す必要に迫られた。さらに、Fを特別扱いしてはいけないと思うあまり、平等の考え方を狭くとらえ過ぎていたことに気付いた。個別のニーズに応じて支援することこそが平等なのだと考えるようになった。同じことを同じようにしても、必要感の違う個々の子どもたちにとって、それは全くの不平等なことなのだ。逆に、ある支援を必要としない子にとっては、その支援が無くても不公平には感じないのだ。むしろ、その子が必要としている別の支援を受けられない時、その子は不公平を感じるだろう。Fのダンボールハウスをうらやましく思う子は多かったと思う。でも、それは一時のことだった。そこへの不公平感を心配するよりも、周囲の子が何を必要としているのかに目を向けて、その子に合った支援をする方が、よほど平等なのだと考えるようになった。狭い平等観にとらわれていた私は、自分で自分を縛って身動きできないようにしていたように思う。Fとの出会いは、私のそのような状況を解き放ってくれたとも言えるだろう。Fが自分の家を壊して卒業だと私に告げたことは、私の心の中をそのまま映し出していたのかもしれない。狭い平等観からの卒業、

私にとってFとの出会いにはそんな意味があったように思う。

(2) コメント

症状は治る道である。発熱という症状を引き起こしている病は、発熱という症状によって治るのである。嘔吐・下痢という症状は浄化によって病を治す働きをしているのである。だからこそ、症状の無い病は怖い。治らない病かもしれないのである。

さて、私は臨床心理士として、治るものなら治したいと思うので「問題」を「症状」として観てみようと思う。症状は病の「あらわれ」であるからでもある。

「あらわれ」を、できるだけ安全に表現させ、その意味を考えてみたい。意味がわかれば、その根っこに病が見えてくる。それは、どのように形成されたのかもわかってくるだろう。

F君の問題は、「帰って来ない」である。帰巢本能が希薄であるうえに、失敗を許されないこととして怖じ気づくから「帰って来ない」のだろう。F君の他の症状として、「感情の起伏が激しく、怒りの激しい時は物を壊し暴力を振るうが、1時間ほどですっかり落ち着く」「自己肯定感が低い。数年前のことをつい最近のことのように思い出し、怒り出す」「長時間の着席が難しく、授業中に席を離れて歩く」「相手の感情を読み取りにくく、場の雰囲気を読めず孤立する傾向にある」「宿題は忘れずに提出できるが、整理整頓が苦手な机やロッカーの中が乱雑になる」と先生は列挙している。

これらの症状の共通点は「繋がれない」「切れている」である。「帰って来るべき基地とつながりが無い・切れているから帰ってこない。感情が激すると平常心に戻るのに時間がかかるのも、平常な自分の状態とつながりが無い・切れているからである。あんなに暴れたのに、けろっと忘れたように落ち着いている。今まで泣いていた赤子がもう笑っているように。遠い過去を思い出して今の出来事のように怒り出す。過去との距離感が薄いのである。今の自分と切れているから、過去の自分が復活しやすいので

ある。また、「自分の場所」と「自分の体」が繋がっていない・切れているから授業中に席を離れ歩くのである。「繋がれない・切れている」が症状ならば、これが治る道なのだろうか。また、そうだとしたら、どのような病から治るのか。

「教室内をうろうろと歩きながらも教師の話を聞いている」ことを見て取った先生は、「教室内をうろうろと歩き回る」症状を矯正しようとしなかった。許せる症状をあえて残すこと。症状を促進すること。これが「治る道」なのである。

「治る道」としてのF君の症状は他にもある。それは「音に敏感」なことである。耳に入ってくる音・声の全てを聞いてしまう、つまり自分にとっての意義ある音・声を仕分ける機能が弱かったのだろう。しかし、これは「切れずに繋がっている」現象である。しかも、「手で耳をふさいで机にうつぶせに」なっているのは、有意義な音・声のみを求め、雑音を拒否する仕草である。意味のある音声との繋がりを求めているF君は、うろつきながらも授業を聞いていたのである。

それでもF君が教室を飛び出すことはあった。「校長先生はじめ、他の先生方は大変協力的」で、「とび出したらすぐに職員室へ電話して。かけつけて職員室でFを見ておくから大丈夫と温かい言葉をかけてくれたことは忘れることができません」と先生は回想している。教室を飛び出したF君を職員室の先生がキャッチする。ここで筆者は、サリンジャー作「キャッチャー・イン・ザ・ライ」の一節を思い出す。<7>

職員室の先生が「必ず追いかける、捜す、キャッチする」が鬼ごっこ、かくれんぼの様に展開したに違いない。これも「治る道」だった。捜すこと、見つけること、受け止めることは、その子の存在を確かなものとしていく。子どもは自分の存在を自分で確認できるようになっていく。鬼ごっこ・かくれんぼは「繋がろうとする遊び」である。切れた子は逃げ、隠れ、追いかけてもらう、捜してもらう、見つけても

らう、ことによって他者と繋がり、世界と繋がり、自分自身の存在と繋がる。

校長をはじめ職員室の先生たちと授業中の先生が繋がることは、F君の「繋がれない・切れている」存在を治していったのだ。

F君は「脱走」して「プールの裏、階段の下の三角の場所、カーテンの裏」にたどり着く。「暗くて狭いところ」が「落ち着く」のだと言う。そこで先生は教室内に落ち着く場所、Fの部屋をつくった。「脱走」「隠れる」は、いらいらを治す道だったのかもしれない。先生はF君がいらいらしたら「意図的に歩かせ」ている。授業中に「うろつき歩く」症状が、イライラから治る道であることを知っている先生は歩かせることで落ち着かせようとしたのだ。それでも駄目な時は「Fの部屋」へ行くように促した。暗くて狭いところに引きこもることは「症状」だが治る道、治療法なのである。このことを誰よりもよく知っていたF君は自分から「Fの部屋へ行きたいと申し出る」こともあった。また、授業に「部屋から「手を挙げて発表すること」で参加することもあったという。

やがて、1学期を過ぎたころから「Fがあんまり教室を出なくなった、目立たなくなってきた」のだった。やがてF君はダンボールハウスに出会う。

子どもはダンボールで遊ぶことが好きである。適度に柔らかい質感と引きこもり（退行）の雰囲気、胎内帰りのような安心感をもたらすからだろう。安部公房作「箱男」<8>は奇妙な非現実感を周囲に与える、ダンボールをかぶって生活する「箱男」の存在論とでも言うべき小説である。

「Fにもこんな家があったらうれしいでしょうね。」と特別支援教室担任に言われた先生は悩んだ。「教室の一角に家が建つ。これを周囲の子がどう思うだろうか考えた時、このような不公平、不平等が許されるはずがないという気持ち」が先生を悩ませたのだった。

自分たちを平等に、公平に扱おうとする先生が、特別扱いする必要のあるFと自分たちの関係について熟慮する。その熟慮する姿勢が、先

生を見守る子どもたちに見える。そのとき、子どもたち一人ひとり、自分が特別に扱われる必要が生じたときに、この先生は必要なことをしてくれる人だと感じたのではないだろうか。

F君は自分の家の建設を始めた。「新しい家」は「新しい自分」と見ることができる。補強したり、窓をつけたりと、新しい自分を建設している。子ども達はこの家を「Fさんの家」と呼んだ。周囲の子はFに「入っていい？」と聞き、Fも自分の家に招待し始めたのだった。「家を通して交流が始まってしまった」のは「予想外」だった。「不公平と考えるかどうか、それは周囲の子どもたちが決めることであって、教師が押し付けることではなかったようだ」との気づきは先生の卓越した洞察力を示している。洞察が生じた瞬間にコンプレクスは水解する。先生の洞察と同時にF君の洞察が生じたところに出会い（エンカウンター）の妙を見いだすことが出来る。先生が「威圧的な態度、厳しい口調」を放棄し自分自身を変革し始めたとき、F君もまた、「いらいらをぶつけた家」を「卒業」したのだった。

5. 事例5－「受け止める」

(1) 出会い経験

男女合わせて35人の5年生。クラス替えをして、新しい友達と出会い、新しい担任の私と出会い・・・おとなしく、静かな時間は初めの3日間だけだった。毎朝出勤前にはおなかを下し、給食時にはおなかがすいているのに食が進まず、ストレスで肌荒れしていたのだから、いろいろあった1年間だった。

思い出されるのは、元気な男子の顔ぶれ。家庭的に問題を抱えている子たちに共通していたのが父親の不在。母親は若く、迫力もあったので、そんな母親に叱られ慣れしているのか、私が少々大きな声で叱ったところで全く応えていない様子だった。隣のクラスはベテランの男性教諭。「担任が逆だったら良かったのに・・・」。この子たちには、怖い男の人の存在が必要だとずっと思っていた。

給食の時間の着替えも遅く準備をしないG児。授業も書写もテストも気が向かなければやりたくないやらない。H児は「わからん」「したくない」と声を出す始末。6月頃には、友だちと言い争ってカッとなったI児がガラスをパンチし、割れてしまった・・・。体格も大きく、暴れたJ児をとめるためには私も体を張った。

J児は、両親が離婚し、母親も出張が多く、祖母と過ごす時間が多い子だった。私が母親と初めて顔を合わせたのはゴールデンウィークの休日、「J児が夜になっても帰らない」と連絡を受けて家に駆けつけた時だった。私が到着した時には、J児は発見され、家に戻って母親に叱られているところだった。学校では、目立つほど体格が大きいJ児がべそをかいている姿はとても小さく、「子どもなんだな・・・」と改めて思った。無事に見つかって良かったという思い。それよりも大きかったのが、母親にうんと叱られて、反省してくれたらいいという思い。仕事を理由に、子育てを祖母に任せている母親を批判する思いもあった。当時、私は独身だったので、母親の気持ちや親子の関係というのがまだよく分かっていなかった。

結婚して、子どもを授かり、子育てしながら仕事をしている今の自分なら、別の思いになっただろう。自分も夫は単身赴任で不在、仕事を理由に自分の母親にいろいろなことを頼りきっている。子どものことを思う気持ちはあっても、目が行き届いているとは言えない自分の家庭・・・。どの家にも事情があり、親も子どもも一生懸命に生きていても、どうにもならないこともある。いろいろな思いを抱えて学校に来ている子ども、様々な事情を抱えている保護者を受け止めるだけの器が、当時の私には無かった。

G児は野球がうまく、走るのが速かったので運動会では大活躍だった。手先も器用なので、図工や家庭科で気分が乗ってくればいい仕事ぶりだった。明るく、ユニークな性格は、クラスを盛り上げてくれた。H児は、男気があるタイプ。その性格が良くも悪くも影響したが、彼がクラスをひっぱってくれる部分も大きかった。体

は小さく、勉強は苦手だったが、友人からの信頼や人気があった。

ガラスを割ったI児も体は小さかったが、勝ち気な性格。運動会の騎馬戦ではクラスの大將になり、大活躍だった。今思えば、どの子にもいいところがたくさんあったのだ。

この学校で教頭先生、校長先生には、担任の私も子どもたちもずいぶんと心配をかけた。当時、校長先生が「遊びの中で子どもが見えるよ。子ども一人一人の違った顔も分かるし、子ども同士の関係も分かるし、先生との関係も変わってくるよ」とお話しして下さった。それからは、昼休みには時間があれば、彼らと運動場でサッカーやドッジボールをすることにした。私のことを大して怖いとも思っていない彼らに真っ向勝負をしても無駄！それならば、子どもと同じ目線で、行こう！距離を縮めていこう！と思っただけの行動だった。5年生男子のボールは速く、強かった。けれど、負けじと受け止めた。そして、本気で投げた。子どもたちは「先生、やるやん！」といった反応で、次の日の昼休みにも誘ってくれた。

運動会やクラスマッチでは、彼らの負けず嫌いな闘志と、有り余るエネルギーをこころざしに発揮させようと、「先生もやるからには、負けたくないんや。勝てるように作戦考えよう」と子どもたちをあおったこともあった。同じ目線に立つことで、彼らの思いやエネルギーを受け止めることができたとは言い切れないが、叱るときには本気で叱り、一緒に泣き、うれしいときにはともに喜ぶことで、「話せば分かる」関係が少しずつできてきた。

そんな彼らとも別れの日が来た。卒業させたい思いもあったがかなわなかった。

離任式の日、体育館のステージから自分のクラスの子どもたちを見ると、彼らが泣いていた。そして私にも挨拶の順が回ってきたが、声にならず、涙が止まらなかった。転出する先生方を見送る花道には、飾り付けをしたアーチが掲げられるのが恒例で、彼らがそのアーチを持つ役だった。膝立ちでアーチを持つ手は震え、涙をぼろぼろと流していた。1度職員室へ戻っ

たあと、最後の挨拶をするために教室へ行くと彼らを先頭に、クラスの子どもたちが廊下で待っていてくれた。H児はお小遣いで買ったのであろう、小さな花を照れくさそうに私にさしだしてくれた。

教室に入り、最後のホームルームで何を話したのか覚えていないが、私も彼らも涙が止まらなかった。

もうすぐ成人する彼らが、どうか社会の役に立ち、未来に希望をもって活躍してくれてますように・・・久しぶりに会えるなら、「母さんに心配かけたらいかんよ～～」と言ってしまおうだろうなあ。

(2) コメント

言うことを聞いてくれない人とは、自分の言うことを聞いて欲しい人なのである。母子家庭で忙しく働く母親たちは、まず自分の言うことを聞いてくれるはずの夫を失っている。「言うことを聞いて欲しい人」たちなのである。おまけに母親は生活の糧を得るために必死で働かねばならない。自然な勢いとして、そんな母親は「自分の言うことを聞いてくれる人としての我が子」を求めるだろう。それは「子どものために言うて聞かせる」態度につながるだろう。従って、子どもは母親に「聞いてもらえない人」となる。だから先生の言うことを聞かない子どもが出来上がる。このように考えると、先生が「迫力で言うことを聞かせる」男の先生でなかったことは、先生自身と子どもたちにとっては幸いなことだったと思う。言うことを聞かせようとしている間は、先生の心身症は続いたことだろう。出来ないこと、してもだめなことに気づくことが回復のスタートなのである。

「給食の時間は着替えも遅く準備をしないG児」は母の手料理を楽しく食べることができなかったのかもしれない。食事を楽しめない人は「餌」を食べて生きているのだ。「授業も書写もテストも気が向かなければやりたくない、やらない。H児」は発達欲求が発生する条件が満たされていない子である。「愛情欲求」が満たされないとする気は起きないのである。「カット

なったI児」は、本当は「ガラス」でなく「自分」を割りたかったのかもしれない。責めたい人を責めることが出来ない人は自虐的になる。うつ的な状態や自死念慮の持ち主とならなければいいが・・・。

J児が暴れるのも「責めたい人」を責めることができないからである。さらに不運なことにJ児は体格が大きかった。外見が大人のようにだと、子どもの悲しみがわかってもらにくいのである。ゴールデンウィークの休日にはJ児にとっては寂しい休日だったに違いない。夜になっても家に帰りたくなかったのは、帰ったら寂しさが募るからなのだろう。しかし、母親が心配し、先生にまで助けを求めるくらいに狼狽してくれたとき、「べそをかいている姿」にJ児はなることができたのである。「とても小さく、子どもなんだな・・・と改めて」先生に思ってもらえることが出来たのだった。

「遊びの中で子どもが見えるよ。子ども一人一人の違った顔も分かるし、子ども同士の関係も分かるし、先生との関係も変わってくるよ」と校長が話してくれたことを思い出して、彼らと運動場でサッカーやドッジボールをすることにした。「私のことを大して怖いとも思っていない彼らに真っ向勝負をしても無駄！それならば、子どもと同じ目線で、行こう！距離を縮めていこう！」と思ったからである。ところが、これが本当の「真っ向勝負」だったのだ。強い先生が弱い子どもを怖じけさせる指導は「真っ向勝負」ではない。勝負とは、むしろ相手よりも非力である者が必死になるところに値打ちを伴うものなのかもしれない。一寸法師が大人の男になることができたのは鬼と闘って勝ったからである。鬼は圧倒的に強い者のはずであった。しかし、一寸法師のすばしこさ、知恵、チクチクと痛い針の刀によって鬼は必死になった。鬼が死にものぐるいで相手してくれたからこそチビっ子は自信を得て立派な青年に変身し、お姫様と結婚できたのだ。「5年生男子のボールは速く、強かった。けれど、負けじと受け止めた。本気で投げた」先生の姿は、あのひょうきんな鬼の必死さではなかっただろう

か。「先生、やるやん！」と子どもたちは反応した。この瞬間がまさしく「同じ目線に立つことで、彼らの思いやエネルギーを受け止めることができた」瞬間だったと思う。人は好きな人の言うことしか聞かないDNAを持っているそうである。真の出会いとは好きになることである。「話せば分かる関係」が、この出会いの瞬間からできてきたのだと思う。出会いの後には別れが来る。先生の離任式ではクラスの子もたちが泣いていた。先生も挨拶が「声にならず、涙が止まらなかった」のだった。先生の内面で何が起きていたのか？それは教えるだけの教師像から愛する人としての教師像への化学変化ではないだろうか。この変化こそ「出会い」なのである。

6. 考察

「教師が教え子との心の出会い経験（感情機能教育経験）を想起記述することが必要であり、個々の記述に校長が臨床心理学的解説と共感的理解を示し、教員全員が共有することが学校全体の心的エネルギーの補給となるのではないか」との仮説は未だ仮説のままである。ただ、筆者は「青い鳥」を全職員に読んでいただき、反響は感知することができた。さらにこれをテキストとして感想を自由に語り合える会をもつことができたなら新たなエネルギーを生み出すことができたかもしれない。ただし残念ながらその機会は無く、私は附属坂出小学校を去った。

ここに、その「反響」の一部を記す。

(1) 校長のコメントを読んで

学級の子どもが問題行動を起こすようになった時、担任はその対応の仕方に悩む。同僚や先輩、管理職の意見を聞いたり、保護者に協力を求めたりして、何とか改善させようとする。すぐに効果が現れるケースもあれば、そうでないケースもある。青い鳥に記載された事例はすべて後者である。自分の指導が悪いのだろうか、他の子はどう思っているのだろうか、この子は将来どうなるのだろうか・・・と悩みは尽きな

い。このような子どもとの出会いとかかわりは生涯忘れられないものである。

校長のコメントには、そのときの子どもの行動の意味、子どもの気持ち、そうせざるを得ない背景、かかわってきたことの価値が記されており、夢中がかかわってきた自分をほっとさせるものであった。ある教員は当時のことが通勤の途中で想い出されて涙が止まらなくなったという。

また、文集にして読み合うことで、自分だけではなく、教員みんなが苦勞してきている事、事例や対応は違うけれど根本は子ども理解にあることが共通理解された。今後、様々な子どもと出会うであろうが、子ども理解の指針としての財産になっている。

(2) 青い鳥経験について

教え子との感動体験は、おそらくどの教員ももっている。しかし、それを語り合うことは少なく、もしあったとしても、ちょっとしたおしゃべりや、酒の席での思い出話の一部に過ぎない。今回、校内の教員が自分の出会い体験を記したこと、校長による心理面からの専門的分析を得られたこと、またそれを読むことで共有できたことで、次のような感想を得る事ができた。

まず、それぞれの教員が歩み、成長してきた過程に納得した。今の教員としての姿と出会い経験の文章は、非常に密接な関連をもっていた。教員その人の個性がどのように活かされ形成されてきたのかがわかったように思えた。

次に、困難に向き合ったときが、教員として成長できるかどうかの岐路であることを改めて知ることができた。困難から逃げずに困難を受け入れ、子どもとの距離を詰めて行こうとする本校の教員の姿に、理想の教師像を見ることができた。

最後に、何気なくしていることにも意味や理由があり、それを推し量ることで、より教育的効果をもたらすのではないかと考えるようになった。自分の文章についての校長の解説文を読んだとき、気づかなかった部分に驚かされると共に、確かにそうだと思えた。この、背景の部分

普段から考えるよう心がけたいと思った。

おわりに

学校教育における教師の情熱の根源には「出会い（エンカウンター）」経験がある。それは、教師としての人生の物語を基礎づけている個人的な神話とも言うべき物語である。〈9〉

しかし、個々の想い出として、個々の教師に眠っている物語は、必要に応じて眠りからさめて今の教育活動のエネルギーを生み出すのだろうが、それはあくまでも個別的な物語にすぎない。個々の出会い経験が普遍的な経験として共有されるとき、それは心的なエネルギーを生む。〈10〉人と人が深く交わるとき、エネルギーが生じる。これが「カウンセリング効果」（1995 氏原）〈11〉であり、人格的変容を促す感情教育の源と云えよう。

<引用・参考文献>

- <1>東山紘久、藪添隆一 1992 システムティックアプローチによる学校カウンセリングの実際 創元社
- <2>東山紘久 2007 教育分析の実際 創元社
- <3>J.ヒルマン 2004 感情教育 —— ユングのタイプ論 —— 角野善宏監訳 創元社
- <4>夏目漱石 1929 草枕 岩波書店
- <5>ヨハン・ホイジンガ 1963 ホモ・ルーデンス —— 人類文化と遊戯 —— 高橋英夫訳 中央公論社
- <6>W.P.キンセラ 1989 シューレス・ジョー 長井淳訳 文芸文庫
- <7>J.D.サリンジャー 200 キャッチャー・イン・ザ・ライ 村上春樹訳 白水社
- <8>安部公房 1982 箱男 新潮社
- <9>M.エリアーデ 1963 永遠回帰の神話 —— 祖型と反復 —— 堀一郎訳 未来社
- <10>藪添隆一 1991 高等学校のカウンセリング —— 学校カウンセリング —— 氏原 寛・谷口正己・東山 弘子編 ミネルヴァ書房
- <11>氏原 寛 1995 カウンセリングはなぜ効くのか 創元社